

青山通りの木立がうつすら柔らかな色が入り交じる、最も美しい季節です。その日の夕、「玄々地唄と舞」が東京・青山の鎮仙会能楽研究所の能舞台で行われました。能舞台で地唄と舞。詳しい方であればこれが現代的な趣向であることがお判りになるでしょう。そもそも能舞台は式楽の場であり、能・狂言によるもののが上演じられるることは少なくとも近代以前には考えられなかつたことでした。世が世ならば身分違いといわれ、実現はおろか、発想すら許されなかつたのです。能舞台での公演にはさまざまなアーティシャンが求められます。玉砂利の下は、そこには無数の壺が埋められています。その上に壺のようなのを敷いて、砂利が載せてあるためこの壺が舞台の音を豊かに反響させるのです。磨き上げられた舞台。聖なる開放空間。耳を澄ませると、舞台の蔭から虫の声が静かに響いています。地唄も舞も能も今こそ同じ古典的の顔をしています。こんな組み合わせは、邦樂二千年の歴史からすれば、皆無に近いほど先例のない、真に前衛的なものなのです。

亥
卷之三

川崎 隆章

『美紗の会』
ニュース
第45号

第45号

夕刻六時三十分、開演。今回の公演は、西澤布衣・福家の元・古澤侑峯師の舞、能樂森田流笛方・松田弘之師の笛で、演目は、まず三絃と舞で「名護屋帯」、つづいて能管独奏で「平調音取」その後児玉信先生による演目解説講話があり、つづいて唄・三絃と能管で小曲「露時雨」。クライマークスは唄・三絃と能管の合奏に舞で「葵上」と続きました。途中、解説講話があつたおかげで曲の由来などがとてもよくわかりました。

「名護屋帯」は桃山から江戸前期にかけ流行した色鮮やかな組紐で、「名古屋帯」とは別。文禄・慶長の役の時、各地より名護屋に参集した将兵たちが、妻のために土産として持ち帰りました。この帯は、遊女たちにも大愛され、恋心を伝える媒体ともなりました。

物語は「松浦の佐用姫（まつらのさよひめ）」を題材としています。出征する夫・狭矱彦を慕うあまり、佐用姫は玄界灘を見渡す領舟振山に登り、遠ざかり行く船団の軍船に領巾を振りつづけ、松浦川河口へと飛び降り、衣干山山道衣を乾かし、呼子の浦まで悲しみのあまり部島の天童山で悲しみして石になつたといふ執念の物語。のちに落語「派手彦」としてパロディ化されました。

調子。秋の調子とされてしまふ。「露時雨」は、文久年間、すなわち幕末の大政変のまつた頃に作られた佳曲で、浅草寺の裏手あたりの風景・風俗を偲ぶ内容。
「葵上」は源氏物語由来の物語。能「葵上」(とも)としても、世阿弥によって改作されたという説があります。朝臣が光源氏の正妻・葵上に取り憑いた物の怪を払う為に、日の巫女を呼んで梓の法を用ひ、あわせたところ、高貴な女性が引かれて六条御所の怨霊となりました。怨霊は宮中の華やかな生活への残念や、葵上への恨み等を語り、光源氏に寄添う露上を妬む。わが身の葉思つた御身を恨めしくする。怨靈は小聖の祈りに負けた。舞台の建物全体がひとつになった。樂器の音のように鳴り響く。それはあの屋根の構造であり、舞台下に置かれた無数の壺の効果でもあります。この反響壺は、明治の代表的大建築の一つである東京藝術大学奏楽堂にも使われており、

ンスでは、深いチヨコレートで艶やかに包んだ菓子を「エクリュ」(稻妻)と呼んで販売する。漆黒の器にひらめく一瞬の艶。そういえばフランクが、これもまた、「玄の中の半影の中に幽然と浮かび上がった古澤侑峯師の舞姿。橋がかりから登場する神秘らしい姿、舞台上で繰り広げられる深遠な人の情念。すべては見事に漆黒の中で見た夢の夢のよう。冒頭でも申し上げた通り、今回のようないふべきは、オーソドックスに見えて実は先例がない。演出の皆様も効果の皆様も、そういう中、まさに中模索を通り抜け、見事な一例を歴史の中に残されたのだと思います。この一例から新たな伝統が生まれることを大切に祈ります。

公演終わって外にでてみれば、しつとりと雨模様。路地が塗れて街灯の光で輝いている。宵闇に虫の声。まるで銀の鈴のようだ。

錦秋のとば口、一〇〇三年十月四日。忘れられない日付となりました。

「瓶の〈瓶〉」も「懸る瓶」

西松布咏

幽玄は闇の中に光を見る
かのその時を

さまざまな色に染めてみたい
やがて玄（くろ）になるまで

平成15年11月13日

たより 『美紗の会』 ニュース

第45号

平成十五年十一月十三日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726

編集責任者
大久保 朋子

ホールとしては小さいながらも、暖かく、伸びやかな響きを生み出しています。そこで、布谷師匠独特的の、地の底から立ち昇るような低い声や、遠く彼方の木々を揺さぶるような甲の声が自由に鳴り響く。癡のない、素晴らしい音環境の中で、布谷師匠が見事な物語を描いてくれました。

幽玄は闇の中に光を見る
かりそめの時を
さまざまに染めてみたい
やがて玄(くろ)になるまで

声はどこから響くのか。な
くのだが。しかしそれならば
はなぜ、どこから響くのか?
板張りに正座して、彼方を見
三弦を抱く人影が、何ご
かを、地唄にゆだねる。それ
だけのことであつたなら、「声
の声」の所在を、尋ねる理
由はなかつただろう。唄うも
のと、聴くものと。唄がそこ
で、そのように、予定調和とし
て、完結するのなら。
そうではないと、三弦を抱
く人影が、教えてくれた。唄
によつてといふよりは、むし
ろ仕草によつて。教えてくれ
ながらかし、「そうではなく
な、どうなの?」は、金輪際
教えてくれそうになかつた
惚れぼれとする。完全黙秘
だ。

仕草」と書いた。頭を傾け
いつさい女へに集中、「彼
女」は、唄うのではなく聴こ
うとしていた。一心で聴きわ
けること! だが、何を? うと
聞くたまのはここで、自分
に訊くほかはない。この問い
もまた、黙秘に合うはず。
ることは覚悟している。され
ば、彼女へは、唄う以上弦を
くことに、全身を傾けて三弦を

る。「唄う」声と、唄うといふ
よりは、「唸る」声と。じつは
もつとあるのだろうが、素人の耳は、ふたつの声が、印象に強かった。
そしてまた、その、ふたつの声は、たんに高低を違えた
ひとつの声ではなく、別の思
いの同時の発露ではなく、かか。
どちらかが声で、どちらかが「声の声」、といふよ
うに。唄う以上に、聞くことに
身を傾ける仕草が、すこし見
えてきたように感じられた。
「彼女」は「ここの」にいかつ
すでに、「ここ」にいるなかで、おそらくは身の傾きを利
用して、傾いたその分、至近
にして至遠の「そこ」にいた
のだ。声と「声の声」とと
を、一身に切り結びながら、
のボリフォニイ。ど素人の、あてづっぽうでは、そうなる
し。喉とよばれる産道で、あ
るいは唇とよばれる裂部で、あ
るいとは、どのような
声とへ声」とは、どのような
訣れを遂げてきたのか、へ
応答を身を傾けて、かねつつか、へ
は彼女へはへ声から唄へと
は逆順に、唄からへ声へと
「幽玄」を浮遊した。
喉をふるわせ生まれた声が、ふたたびへ声に吸われた。ふたつの帰路を描いては、唄が唄
ふたたびへ声になれる、「悪い」とはいふことのよう

ジョン・ソルトの英訳では
この「立つ名」は「rumours」と
なつていて、「うまい！」と
唸つた。なるほど「立つ名」
とは「うわさ」のことであつ
たか。そのことがわからば、
「名護屋城」はするすると解
けそうだ。
　許されぬ恋に身を焦がす
「おんなごころ」。一行目の
「逢ふて立つ名が立つ名の内
か」には、逢いたい相手に逢
うことが許されない女の、せ
めてもの強がりがじみ出て
いる。逢瀬のうちに立つ噂な
ぞ、たいしたものじゃないよ
というのだ。

　強がりは二行目と三行目で
いつそう激しさを増す。「逢は
で焦れて立つ名こそ／まこと
立つ名のうちなれや」と。「逢
はで焦れて立つ名」を「ほん
とうに聴くようなら、もはや
「恋の病」ではなく、ほんも
の幻聴病だから、きっと医
者が必要になるだろう。

　けれども意味の上からは理
不尽に見えるこの強がりが、
かえつて「彼女」の心のうち
の深すぎる哀しみを映す鏡と
なる。この鏡が前掛かれてい

ジョン・ソルトの、超英訳に助けられて、ここまで書いた。くやしいから「あら捜し」を、ひとつだけ。友情とは、そういうものだと、うそぶきつつ。

「の」「晤ふ仲」をソルト博士は‘within my lovee thought」と訳した。つまり「晤ふ中」と。これは博士の責任ではなく、翻訳時のテクスト＝原文の誤りだ。ここで「なか」は、〈彼女〉の頭の「中」ではなく、女と男の「仲」だろう。

思いを寄せ合う、女と男の「仲に」、「隔ての襖」。襖」というところが、憎い。超えられそうで、超えがたいく。たぶんこれが「隔てのコンクリート」や「隔ての鉄壁」だったから、さすが「彼女」の思いも、焦がれるのではなく、消沈したはずではないか。「あるに甲斐なき捨小舟」も、また憎い。ところどん朽ち果て、舟の象を失つてしまえば、やつと未練も断ち切れそうなのに。

嵐三右衛門、嚴つい名をした男が、やらかな「おんなごころ」を、捏造したのだ。

三味線を聴いたり演奏したりする機会を与えていただけま
したが、部屋の大きさや内装仕上げなど建築空間の違いによつて三味線の音が変わるものにいまさらながら驚いています。稽古場でビンビン鳴つていたはずの私の三味線の音が、ゆかたざらの会場だつた青山荘では往々たきりで戻つてこない感じで何か頼りなく、ついつい手にも力が入つてしまいなかなか思うようにならない。無論私の腕のせいもあるとは思うのですが、その結果は……相方の方申し訳ありませんでした。

江戸時代に端唄や小唄の舞台であったお座敷は、窓や扉が吸音性の障子や襖の木造建築であり、しかも開け放しで演奏されることが多かつたようなので、空間としての響きは全くないと言つて良いぐらいだったと想像されます。演奏者は屏風を舞台上の音響反射板として利用しながら響きのない音場で、暗闇に消えるはかなさや無限を繊細に表現していだののでしょうか。ある音楽評論家は、「三味線音楽の妙味は、詞のだけに合わせた節回しの微妙な流れと、唄い手の細くて折れてしまいそ

これまで五六十代のジャズが好きでよく聴いていたのですが、三昧線を始めてみて、邦楽の表現の奥深さに惹かれるながらも、つかず離れずと言うか、ずれているようではれていない邦楽の間の取り方の難しさに戸惑っている現状です。しかし、即物的で人工的な音がもてはやされてゐる時代に、三昧線を通じて江戸の粹やスローバードに接することは私にとって他の何物にも代えがたい贅沢のような位置づけで、ほんまに今までのめり込んでいます。

三昧線のこともさりながら美紗の会に入つて最もよかつたと思つてゐることは、おさらいの会の後の打ち上げです。本番でたっぷりと冷や汗、脂汗をかいた後のビールの美味しさも格別ですが、なんといつても先生を始めとして兄・姉弟子の方々の温かい人柄に触れることができることがあります。年齢や経験の差を越えて一緒に和気藹々とすごさせていただく時間は本当に美紗の会万歳といった感じです。今後ともよろしくお願ひいたします。

今回披露されたのは「滝の白糸」(新内)と田中優子さんによる「幻のお三重」(歌行燈より)の二曲。赤い毛氈の上に座った師匠は、つい同じ目で見返つた空間を深く不思議に包み込みました。味線の響きもまた不格好でした。鏡花が「個人的には前衛的な私です」といふなりの至近距離で、まことに驚いた師匠は、これまでの「滝の白糸」には見たことのない印象を発見しました。記念すべき公演後の一刻。記念館から街へ繰り出しました。しかし、茶屋街へ向かうと、そこにはいつの間にか多くの人々で賑わっていました。そこで、師匠は「福嶋三弦店」へ向かいました。そこは、以前は喫茶館だったのですが、今では金沢市指定保存建造物で、お茶を一緒にさせていたたまきました。昭和初期まで営業していた茶屋を改装したといふことで、朱塗りの階段部屋が朱色で、青い屋根が朱色の茶室へと見事に変身したのです。

地唄「名護屋帶」雜感

鈴城雅文

美紗の会に入門して…

繩岡好人

金沢でのひととき

世界展記念イヘント

編集記後記
第二十六回美紗の会を開催し、N H K 青山荘で、九月七日、なつに冷や汗をかきながらも和やかなようになり今年のカレンダードームよいよ大詰めとなつてまいりました。そこで十二月五日（金）時より一ゆく年に想い人生のあれ程の唄声・情の糸と銘うつてわが美紗の会の西松布咏が「シルク・ソウル霜月」銀出展演のいります。年忘れ座の小宴舟看「素處」にての樂しいに皆様ふるつてご参加下さいませ。
大久保

昨年開催された田中優子先生による資生堂サクセスフルエイジング講座「いくつもの人生」が求龍堂より「江戸の意氣」のタイトルで全国書店にて発売されています。多才なゲスト・松岡正剛、西橋健、北山修、ジョン・ソルト、篠田正浩氏に続き、西松布咏の「三味線で聴くいくつもの人生」で弾き語りを交えながらの対談や想い出の写真が掲載されています。

いさぎよく「老い」を生きるたくさんのヒントが盛り込まれている「江戸の意氣」是非お読み下さい!